

編集後記

本誌は、札幌市文化資料室が27年にわたる新札幌市史刊行事業の完結後、新たな組織目標となった札幌市公文書館へ移行する過程をできるだけ忠実に跡付けていくというコンセプトに基づき、職員を含めた関係者による講演録や調査研究論文、あるいは事業活動紹介などを中心に平成20年度から年1巻のペースで定期刊行してきました。

そして平成25年7月1日、札幌市公文書館が開館を迎えた時点で本誌の既刊は第5号にまで達していました。

本号は、前号編集後記の予告どおり、これまで刊行した5巻につなげる意味で『札幌市公文書館研究紀要第6号』といたします。それは私たちが創刊時から一貫してきたコンセプト、すなわち公文書館業務（単なる開設準備だけではなくその後の運営・維持管理も含めて）に関わるさまざまな調査研究の成果を、紀要の執筆内容の中心に据える姿勢をこれからも堅持していこうというひとつの決意表明ともいえます。前組織からの継続性とこうしたコンセプトの連続性から、あえて札幌市公文書館研究紀要創刊号ではなく、通巻第6号としたものです。

札幌市公文書館の事業活動とその調査研究成果を、引き続き全国に向けて発信していくことにより、今号から消えたこれまでの副題「公文書館への道」はこれからの隠された副題「公文書館としての道」に発展継承されていくことにもなるわけです。

また、既にお気づきかと思いますが、誌名が変わったこの機会にこれまでのB5版からA4版に本誌もサイズを変え、また、レイアウトも縦書2段組から横書1段組へと変更いたしました。従前のコンパクトサイズを支持する意見もありましたが、全国的な公文書館研究紀要の主流ともいえる仕様形体に、この機会をとらえて近づけることにしたものです。ただし、表紙の色はこれまでどおりとし、一定の継続性は残しました。皆様方には新しい誌面にも早く馴染んでいただければ幸いです。

さて、本号の最大の特色ですが、それはまぎれもなく開館記念特集号であることです。そして、この特集号は過去最多の執筆者（8名・第2号と同数）によって、過去最多のボリュームを更新しているということも付け加えさせていただきます。

安藤・秋山報告は公文書館の職員として開設前後の事業状況を報告したもので、下田・木村両審議会委員の寄稿はそれぞれの専門的見地から公文書館に対する強い期待を表明されたものです。高井・竹内論考は原課と公文書館という立場の違いはあるものの公文書館の理念と実践の方向性について論じたものであり、鈴江論文は札幌市公文書館を例に公文書引継移管制度のあり方について本格的に論じられたものです。また、大濱講演録は7月1日の開館記念講演録にさらに加筆・修正をされたものとなっています。

この開館記念特集号に対して皆様から寄せられるご意見・ご要望につきましては、次号の企画構成などに大いに参考とさせていただき考えさせていただきますので、当館の事業活動に対する変わらぬご理解・ご支援と合わせてご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

なお、本誌は奥付にURLを記載している札幌市公文書館ホームページの刊行物ページよりダウンロードができますので、こちらもご活用いただければ幸いです。（T・K）